

温泉と花火

冴木一馬

I はじめに

1987年から花火の撮影を始め全国の花火大会を巡ってきた。時間を追うごとに「花火師」という職業に関心を抱くようになり製造方法や打ち上げなどを取材してきた。そのような時に花火師の資格を取得することになり、それ以降は世界中の花火を記録しながら火薬を含めた花火の歴史や文化を研究している。花火大会には数万人から数十万人、多くは百万以上の観客が訪れる。花火は瞬間の芸術とも呼ばれ老若男女を喜ばせることができる最高のエンターテインメントだと考える。また、数千万の予算で数億の経済効果があることも実証されている。筆者は花火のあらゆる可能性について研究するもので、すでに「花火と観光」というテーマでは、観光&ツーリズム第19号で書いた通りで今回はより細かく花火と温泉を結びつける可能性を探りたい。

1. 研究の背景

日本人は温泉と花火が大好きである。日本で温泉に出掛けることは古くから伝承される湯治文化と、その後の観光という二つのカテゴリーがあると考えられる。湯治文化は江戸時代に定着し、字のごとく「療養」が目的であり観光とは異なる。筆者は山形県の鶴岡市の出身だが幼少の頃に、祖母が雪深い冬に湯治に出掛けるといい一週間ほど家を空けるのだが「とうじ」というものを理解していない子供にとっては不思議な出来事であった。祖母は近くの湯田川温泉に、毎冬になると父が車で送迎をして連れて行った。1週間ほどして帰宅すると肌の艶がよくなり若がえったように見えたものである。近年は湯治という言葉も耳にしなくなり、若者たちは単語すら知らない状況である。

観光としての温泉はオイルショック以降、旅行形態の変化から温泉旅行が減少した。(浦達雄・観光研究論集12)社員旅行を含む団体旅行の減少なども大きく響いた。しかし、温泉地によっては花火イベントを用いた起爆剤により全体の稼働率を大幅に上げている地域がある。ここでは成功している複数の温泉地の取り組みについて花火の近年の状況を考察しながら報告する。

2. 研究の目的

花火というアイテムを使用することによって温泉地の活性化に結び付けることはできないのか。また、温泉と花火をプラスすることによってビジット・ジャパンの目標である「2020年までに2000万人」のインバウンドが可能であるのか。クールジャパンのひとつとして海外に発信して観光客の誘致に繋げることを目標にして探るものである。今回は洞爺湖温泉観光協会のこれまでの試みを参考にしながら先述した内容に基づいて検証してみる。

II 花火の概説

1.

天文12年（1543）、8月25日、戦国時代の中期に中国船に乗ったポルトガル人が種子島に漂流し火縄銃と弾に使用する火薬をもたらした。島の主である種子島時堯（ときたか）は今までに見たこともない妙薬を入れた筒状の火縄銃を高額にて二挺を買い入れた。そして弾に使用される火薬（妙薬）の製法は笹河小四郎に学ばせ、刀鍛冶・金兵衛清定に鉄砲を作るように命じた。

その後、一挺を紀州根来寺の杉ノ坊へ譲り、また噂を聞きつけた堺の商人・橋屋又三郎は製法を学んで技術を持ち帰り、鉄砲づくりを始めた。

火縄銃をきっかけに花火の元になる「火薬」が導入されたわけだが、その後「はなび」（花火もしくは焰火＝日本の法律用語では煙火）というものが作られ、火（fire）の花（flower）を愛でる行為が始まる。日本で初めて花火を見た著名人は伊達政宗で天正17年（1589）7月7日、米沢城において唐人の揚げたもので、翌8日には御自身でも行っている。その後、14日にも唐人4人が訪ねてきて花火を揚げている。

戦国時代が終わり1600年代になると、三代将軍家光が花火を奨励し江戸では大流行する。それによって当時の木造建築の欠点である燃えやすいことから起こる火災が頻発するようになり、花火禁止のお触書（町触）が複数回に渡り発令されることになる。行政が主導で揚げた最初の花火は享保17年（1733）に八代将軍吉宗が前年の大飢饉と流行り病による多くの死者を弔うために開いた水神祭が始まりとされ、これをきっかけに翌年の川開きの初日に花火を揚げるのが恒例となり、納涼文化として根付いていくことが定説になっているが徳川実記をはじめ、その他の資料等からもそのような事実は今のところ見つかっていない。

花火の発達は武家社会と民間の両方で発展する。民間では、おもちゃ花火や祭礼の中での奉納花火で、武家社会では、あくまでも兵器としての利用から打ち上げ花火に技術が投入される。民間の記録では、永禄3年（1560）の吉田神社があり、米沢同様、小さな竹筒に黒色火薬を詰めた噴き出し花火が見られる。

元龜3年（1572）には、五箇山で硝石の製造をはじめ一部地域に供給するようになる。天正10年（1582）4月14日には大分県臼杵市のイエズス会聖堂にて聖土曜日の夜に花火が行われた。多くの手の込んだ仕掛け花火が披露され多くの人々が花火を一目見ようと行列になったとルイス・フロイスは書いている。これは、当時のポルトガルから持ち込まれたものと考えられる。

この頃より花火と鉄砲の技術は全国的な広がりを見せ、流星花火の原点と呼ばれる「のろし」（この場合は最初の流星花火）も慶長5年（1600）に石田三成が関ヶ原の戦いで西軍の合図として打ち上げている。

花火は火薬の発見とともに世界に広まった。中でも日本は後進国であったが、徳川政権の約300年間、他国が火薬を利用した武器開発に専念している間に平和な日本では花火の技術が発達し今では世界一と誇れるようになった。また、花火が存在する国は約30カ国で、私たち一般人が楽しむ「おもちゃ花火」と呼ばれるものは、その半分の約15カ国にしか存在しない。何故なら西欧の多くの国々では長らく宗教や人種の違いによる紛争が続き、例え「おもちゃ花

火」といえども一般人に火薬を扱わせない文化が色濃く残っているからである。まさに花火は「平和の象徴」そのものである。

現代の花火は昭和25年の火薬取締法の制定により専門の業者のみしか扱えない。それまでは誰でも好きなものが作って自由に楽しんでいた。しかし江戸時代の花火は徳川家が親藩と雄藩にしか火薬の扱いを許さなかったため花火のある地域は限定されている。近年はメトロポリスであるドバイでも、何かあるごとに西欧から花火師を招聘して打ち上げている。特に2014年のカウントダウン花火では45万発を打ち上げ、ギネスに登録された。

2. バブルと花火

戦後の昭和、慰霊の花火や現在の隅田川花火の復活等に伴い、全国に花火を打ち上げることが広がる。これはマスメディアの発達によるところが多く、他所が上げるならうちも上げようなどとチェーン現象によって広まった。

始めは火薬などの取り締まり規制などに関わる行政が市民サービスなどの一環として打ち上げることが多かったが、時が経つにつれて商工会議所や観光協会などが主体となり街おこし的な花火大会が増加した。それに伴い花火業者も増加し昭和25年の火薬類取締法によって花火の専門業者が増えた。

3. 花火の良し悪し

日本の花火は海外の花火師の間で、世界一の芸術品と呼ばれている。これには幾つかの理由があり日本の花火には大きく三つの特徴がある。ひとつは真円になること。これは綺麗な真丸になることである。二つ目は丸の中に複数の芯があること。芯は一つであったり二つであったりする。一つの場合は芯と外側の円で二重丸になっている。これは「芯入り」(しんいり)と呼ばれる。二つの芯があるものは三重丸になっており、「八重芯」(やえしん)と名付けられている。現在のところ芯は五つまで作られ、六重丸になって「五重芯」(いつえしん)と呼ばれる。あいだに「三重芯」(みえしん)、「四重芯」(よえしん)がある。層が増えることによって〇〇芯と数字がプラスされるが、二つの芯がある三重丸だけが、八重芯と呼ばれるのは、開発された昭和3年、これ以上のものは絶対に作られることはないと製作者が「八重桜」に似ていたことから「八重芯」と名付けられたとされる。そして最後の特徴は「星」(ほし)と呼ばれる発光する火薬の色が変化することである。青から黄、紅(花火業界では赤色のことを紅と表現する)から緑、そして青と三段階に。このように星の色が変化することも日本の花火の最大の特徴である。

花火大会の中には複数の競技会が存在する。最も歴史の古い大仙市の全国花火競技大会、そして土浦全国花火競技大会、やつしろ全国花火競技大会、諏訪湖祭湖上花火大会、伊勢神宮奉納全国花火大会、全国選抜長良川中日花火大会、全国煙火競技大会、赤川花火大会、ふくろい遠州の花火、全国新作花火競技大会など、部分的なプログラムも入れると十大会以上ある。いずれも先に書いたように日本の花火の特徴を踏まえたうえでの芸術性が問われる。また、スターマインといって連続で打ち上げることも行われていたが先ごろではミュージックスターマインの主流により、音楽に合わせて演出を競うプログラムも増加傾向にある。

4. 音楽と花火

1983年に日本にTDLがオープンすると、花火業界には激変が起こった。それは音楽に合わせて花火を打ち上げるという行為である。今や音楽花火は業界を席捲しつつあるが、当時の日本では考えられなかったことである。

音楽に合わせて打ち上げるにはコンピューターなどの電気操作により遠隔点火方式を用いる。それまでの日本では、筒の傍らで花火師がシントルと呼ばれる火種を落としたり、早打ちと呼ばれる数人での作業によって打ち上げられてきた。今まで花火師という職業の中にITという存在がなく誰しも驚いた。

当初は年配の花火師はこれを拒否した。「花火師たるもの筒の傍らで火を点けるのが心意気である」として伝承が続けられてきた。また、男子社会であることも推察される。これが、TDLの花火によって覆された。音楽に合わせてたり、レーザー光線などを使用することにより、花火大会から花火ショーへと転換したのである。いち早く、それを取り込んだのが東京日本橋にある株式会社丸玉屋で、アメリカから花火専用のコンピューターシステム「パイロデジタル」を導入し音楽花火の先駆者となった。

海外では、音楽に合わせて打ち上げるのが一般的で花火を打ち上げるための曲も書かれている。特に有名なのが、ヘンデルの「王宮の花火の音楽」で1749年4月27日にロンドンのグリーンパークで行われた祝賀行事であった。1748年10月7日にアーヘンの和約を祝い、国王ジョージ二世自らが指示して作られたものであり、野外のため弦楽器を使わず管楽器をメインに緑の木々の中で鳴り響くように作られたという。

Ⅲ 温泉地の活性化

1. 温泉と花火

ここ20年ぐらい前から全国の温泉地は宿泊客の減少に追い込まれている。

特に私が就職した30数年前頃には、まだ社員旅行というものが一般的であり、中小も含めて年に一度は温泉地へ旅行した。減少した原因は若者の不参加が一般的な表向きの理由だが会社によっては福利厚生削減や転換なども考えられる。そのような理由から各地の温泉地ではホテルや旅館が廃業もしくは閉鎖に追い込まれるなど苦しい状況が続いている。そこで、温泉地の誘客に一役買っているのが「花火」というツールである。元来、日本の夏の風物詩である花火大会はほとんどの地域で行っている。それは温泉地でも例外ではない。ここでは、静岡県熱海温泉と北海道の洞爺湖温泉、岐阜県の下呂温泉と長野県の上諏訪温泉の状況を紹介する。特に洞爺湖温泉については別項目で述べたい。

熱海市では昭和27年から花火大会を実施、平成27年で64回目を迎える。きっかけは昭和24年8月31日に大被害をもたらした「キティ台風」と、翌25年の熱海駅前火災、そして10日後の、979戸が焼失した熱海大火からの復興として始められたものが夏の風物詩として続いているのである。64回目を迎える花火は、8月5日だが、それ以外にも温泉地への誘客の手段として花火を打ち上げている。2015年の状況では、8月5日（火）と20日（水）が熱海市観光協会の主催。春花火の3月30日（日）と4月12日（土）は、熱海温泉ホテル旅館協同組合が主催で、他にも7月21日（月・祝）、26日（土）、8月8日（金）、17日（日）、29日（金）、9月15日（月・祝）、12月7日（日）、14日（日）、23日（火・祝）と合計13回行わ

れている。日程については過去のデータから最も効率の良い日に合わせてあり、花火の時間や玉数も夏とそれ以外の季節で考慮されている。一般的な花火大会のスタート時間は、7月では7時半、8月になると日没時間がはやくなるので7時からが最も多い。しかし、宿泊客を対象にした花火大会なのでスタート時間は全て午後8時20分に設定されている。宿泊客が夕食を済ませ一段落した時間帯である。終了は夏の場合は午後8時50分、それ以外の季節は気候や寒暖にも考慮して午後8時45分になっている。玉数のボリュームも夏が多く、それ以外は4割ほど減らしてある。花火を見るのは宿泊客だけとは限らない。観覧する手段としては海沿いや熱海城がある山手のほかに、船から見る花火クルージングも熱海港から出航している。花火の場合、早い時間からのスペース確保が必須とされている。宿泊客の場合、夕食を済ませたからの会場入りになるので、スペース確保を自らしなくても済むように宿泊者専用観覧席を会場の中央に設けている。このような徹底したサービスを含む開催によって花火のある日は、ほぼ満室状態になる。熱海市振興公社によると花火大会を開催することによって売上効果があると回答した事業所は51.6%、業種別に見ると、「食料品」「バス・タクシー」「飲食料品卸売」「飲食料品小売り」「その他小売り」「ガソリンスタンド」「不動産取引業」「洗濯・理容・浴場業」「他の生活関連サービス」「宿泊施設」「その他のサービス業」などで50%以上を軒並み超えており、主催者の運営支出、1,655万円に対して観覧者が市内で消費した金額は5億6,112万円に達した。

下呂温泉では、2014年12月に「花火ミュージカル冬公演」を6日(土)、13日(土)、20日(土)の三日間20時から15分間、そして「クリスマス特別公演」を24日(水)に20時から30分間行っている。熱海同様、開始時間は宿泊客が対象の時間設定である。年が明け2015年には「花火物語」として1月5日から3月20日までの毎週土曜に20時30分から10分間上げている。夏は8月1日からの「下呂温泉まつり」にちなんで、1日は龍神花火、2日は下呂おどり花火、3日は「花火ミュージカル夏公演」として20時から45分間の打ち上げが行われた。

長野県諏訪市の上諏訪温泉ではどうだろうか。毎年恒例の8月15日には「諏訪湖祭湖上花火大会」が行われる。こちらは19時からで花火師の競技会になっており全国放送のテレビでも毎年生中継され諏訪湖祭実行委員会(諏訪市観光課内)が開催。そして9月の第一土曜(2015年は5日)に行われる「全国新作花火競技大会」は社団法人・諏訪観光協会の開催で19時から20時30分まで、約18,000発で、新作の花火競技会である。他に7月26日(日)から8月31日(月)までの毎日「サマーナイトフェスティバル」と称して毎日20時30分から約15分間花火が打ち上げられる。フィナーレは、9月6日の全国新作花火競技会の翌日で、20時から約40分間の花火で締めくくられている。このように、熱海を始め各温泉地では花火大会を複数行うことによって温泉地の活性化に力を入れている。

2. 洞爺湖温泉の取り組み

洞爺湖温泉は北海道の南西部、カルデラ湖の畔に位置し大きな基幹産業はなく古くから観光業に力を入れてきた。温泉は明治43年に発見され、大正6年に最初の旅館である竜湖館がオープン、大正末期には四軒になった。平成10年に15軒にまで増えた宿泊施設は現在10軒まで減少、土産店も15軒あったが今では、二・三軒しかなく土産店組合も解散してしまった。これ以上の宿泊客の減少を食い止めたいと集客の柱にすえたのが花火大会である。今や2015

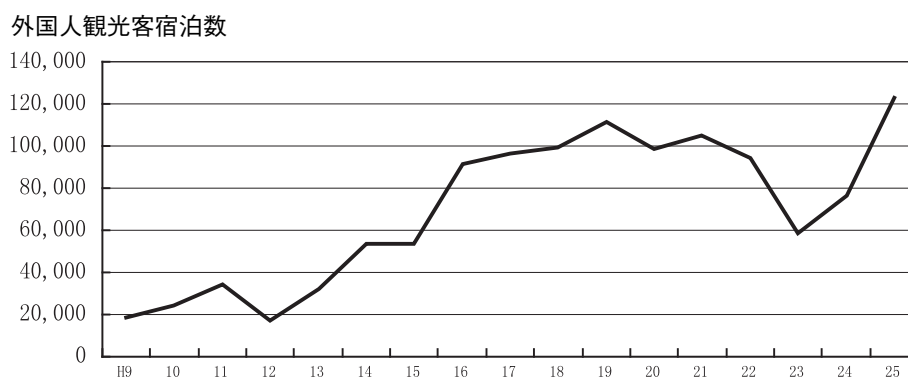
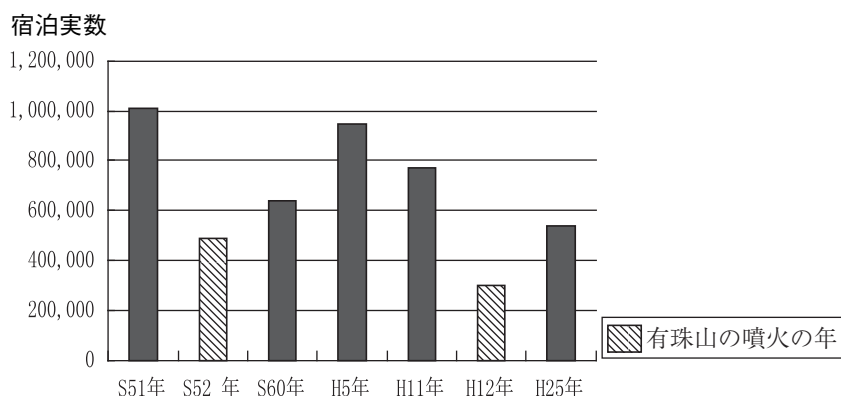
年の旅行情報誌のアンケートでは、全国で17位、道内でも2位にランクされ人気を誇っている。洞爺湖周辺は支笏洞爺湖国立公園に指定されており、2009年には洞爺湖有珠山ジオパークが日本で初めての世界ジオパークに登録されたことでも有名である。

減少の一番の原因は三度に渡る火山の噴火である。一度目は昭和18年(1943)から20年(1945)までの昭和新山が生まれたもので死者一名を伴う。二度目は昭和52年(1977)で有珠新山が生まれた時で三名の死者が出ている。三度目は平成12年(2000)で全町避難指示が出された。宿泊数では昭和51年に100万人規模だったものが翌年の噴火で半分に激減。その後は風評被害などから中々伸びず一進一退を続けてきた平成11年は77万人となったが、またもや翌年の噴火で30万まで減少した。

花火を始めたのは昭和57年(1982)からで、当時の観光協会の若狭幸蔵氏と副会長の濱野浩二氏、常任理事の故・唐神幹夫氏らが何とか客足を戻せないかと考えた末のアイデアであった。5,450万円の予算で短時間ではあるが、6月10日から7月31日までの52日間花火を打ち上げた。翌年の昭和58年は76日間、昭和59年は87日間、昭和60年からは三か月間上げ続け、平成5年からは12年の噴火時を除いて半年間上げている。始まりは4月28日と決め10月31日までと平成13年から固定している。花火を打ち上げると他の温泉地のように宿泊施設はほぼ満杯になる。洞爺湖の花火は全国に浸透し様々なメディアで取り上げられるようになり今では洞爺湖=花火のイメージに繋がっている。花火を行うために花火専用の船まで作ったが、やはり半年の間に、二・三回は天候により中止に追い込まれる。本来は一年中上げたいのだが、天候と国立公園の規制などでできない。そこで、冬はLEDを使ったイルミネーションを行っている。他にも「洞爺湖温泉冬まつり」を実施している。2015年は2月4日(水)から12日(木)までの9日間、20時30分から花火を打ち上げている。冬まつりでは、「人間ばんば大会」や「かき氷早食い大会」なども行われ、盛り上がっている。

花火大会が定着し社会に広まりを見せたのは近年のインターネットの普及によるところが大きい。特に海外にアピールするには英文のウェブサイトも必要不可欠で洞爺湖温泉観光協会も力を入れ、英語版のパンフレットも作成している。先にも書いたが日本の花火は世界一綺麗な芸術品として認められることが多く、サイトから日本の花火の素晴らしさが写真で伝わってくる。また、動画サイトでも日本の花火が簡単に閲覧できるようになり、一度は日本の花火を生で見たいと思うものである。特に外国人には北海道の洞爺湖温泉は「花火」というイメージが強いらしく、チェックインを済ませると打ち上げの時間を確認されるほどだ。平成9年には1万8,000人ほどだったが25年には12万3,000人まで伸ばし、調査したホテルも当日は100%が海外からの観光客であった。

洞爺湖の特徴は水中花火で水面に半円の鮮やかな花を咲かせる。海外では中々見られる花火ではない。何故なら花火玉の構造が異なるからである。日本の花火玉は球形で作られ、開発(破裂)すると綺麗な球体になる。これは水上でも同じことで水面を見ている私たちは上部半分の半円を見ている。しかし西欧の花火は円筒形で作られ開発(破裂)しても球体になることはない。だから日本の水中花火も世界一綺麗なものである。この映像が動画サイトなどで紹介され、海外からは是非とも見たいと洞爺湖を訪れるようになった。また、花火業者も以前は固定だったが近年は道内の業者の売り込み合戦が激しく、プレゼンをしていただき選定している。



VI 今後の課題

日本では夏の納涼花火以外も含めて年に約 8500 回近く上げられている。夏以外の花火は祭り、もしくはイベントでの余興の一部であり昨今の流行である音楽花火が主流になっている。しかし日本の花火の特徴は割物（わりもの）と呼ばれる世界一の芸術品であり納涼文化として発展してきた花火大会では、一発一発の技術をゆっくりと堪能することに本来の目的があるのではないだろうか考える。音楽花火などの演出で短時間に大量の玉を打ち上げることは日本の花火には余り向いていないような気がする。やはり温泉に浸かり食事を済ませ浴衣を着て、のんびりと楽しむことにより日本の花火の良さを体感できるのではないだろうか。したがって、前述部分をもっと海外に売り込みインバウンドに結び付けることが肝要であると考えたい。また打ち上げ花火を見た後には日本特有の線香花火なども浴衣姿で楽しみたい。温泉と花火を組み合わせた納涼文化を官民で連携しながら推進すれば、ビジットジャパンの目標に到達できると考える。

※言葉の表記について

A 揚げる

江戸時代後期に至るまでの打ち上げ花火が完成されるまでは花火をすることを「花火を揚げる」と表現している。「上げる」の場合は打ち上げ花火のことである。

参考文献

「三河煙火史」愛知県煙火組合

「日本列島花火紀行」山と溪谷社 冨木一馬 著

「花火の本」淡交社 冨木一馬 著

「伊達治家記録」宝文堂

「三田村鳶魚全集」第9巻 中央公論社

「南浦文集」南浦文之 著

「熱海市の振興と花火大会の経済効果」財団法人 熱海市振興公社

資料提供

一般社団法人 洞爺湖温泉観光協会